

優秀特別賞「レノファ山口FC賞」 心のバリアフリーを願い

防府市立小野中学校3年 倉床 陸

「オリンピック」と聞くと、多くの人が「四年に一度の世界的なスポーツ大会だ。」と頭に描くことができると思います。では「パラリンピック」はどうでしょうか。こちらも世界的なスポーツ大会ですが、違うのは障害者対象の大会だということです。残念ながらこちらはあまり知られていないというのが実情だと思います。日本では長らく障害者スポーツになじみがなく、新聞のスポーツ面に掲載されることもないようでした。平成12年に入り、車いすテニスの国枝選手の活躍によりやっとスポーツ面に掲載されました。平成12年と聞いて、つい最近のような気がして驚きました。テニスの錦織選手のことはよくメディアで取り上げられるのに対し、国枝選手のことはほんのわずかしき取り上げられません。国枝選手はグランドスラム車いす部門で男子世界歴代最多優勝の記録保持者です。日本人として世界で活躍する、数少ないすばらしいアスリートの一人です。しかし、そんなすばらしいアスリートでもあまり知られていません。それだけ障害者スポーツは国民に浸透していないということです。

僕には三つ年上の兄がいます。ダウン症で知的障害を持っています。知的障害者には軽度から重度の人まで様々な人がいます。中には言葉を話せない人もいますし、急に奇声を発する人もいます。ですが、僕たちと同じように生活し、同じように生きています。知的障害者を怖いと思ったり、可哀想だと思ったりしたことはありませんか。残念なことに、まだまだ障害者に対してそのような感情をもっている人がいるのが現状です。僕は兄と出かけると、じろじろ見られます。一番辛かったのは、振り返って

「あの子、同じ顔になる障害の子だよ。」

と言われたときでした。確かにダウン症の人は似たような顔つきになります。染色体の問題なので仕方ありません。でも、鼻が低いなどといった僕たちと同じような個性があり、僕たちと同じように両親に似ていて、皆同じ顔ではありません。何か言われた時に、母はいつも、

「言った人も悪気があるわけではないよ。障害のある人と接したことがないから言うんだよ。」

と言っていました。

僕は幼い頃から兄の運動会や園の行事に行っていたため、障害のある兄の友達をたくさん知っています。兄が車いすの子と仲が良かったので、その子の車いすを押してあげることがありました。その時に、意外と重たく、少しの段差があるだけで進むことができず、苦勞したことを覚えています。いつも僕が普通に歩いている道が、車いすにとってはこんなにも大変な道なのだと感じました。現在は少しずつバリアフリー化が進み、以前よりは車いすでの外出が楽になったそうです。ですが、まだ道の段差やスロープ、車いす専用トイレが十分には整備されていないのが現状です。もっと社会的整備が進み、障害者にとって住みやすい環境になってほしいと思います。障害があることは決して不幸ではありません。ですが、少しだけ不便なことはあります。車いすを押すという経験をし、その経験をしていなければ分からない不便さを僕は知りました。しかし、不幸と不便は全くの別物です。逆に便利だと幸せなのでしょうか。人の幸不幸はそんなことで決められるものなのでしょうか。

僕の兄のような知的障害者、兄の友達のように車いすを利用する身体障害者、様々な障害のある人が出場できるのがパラリンピックです。2020年には東京で開催されることが決まっています。せっかく日本で開催されるのですから、オリンピックだけ盛り上がるのではなく、オリンピックと同様にパラリンピックも盛り上げてほしいと思います。また、パラリンピックにも目を向け、もっとメディアで扱ってほしいと思います。障害者への理解が進まないのは、母も言っていたように障害者と接したことがないからです。パラリンピックを通して、少しでも障害者への理解が進むことを期待しています。東京オリンピックに向け、これからどんどん社会の整備が進められると思います。それは大変すばらしいことです。地方は都市部に比べ、バリアフリー化が遅れています。地方も都市部と同じようにバリアフリー化が進めばいいと思います。そして、何より一番に思うことは心のバリアフリー化です。アメリカでは障害者の存在が日常化しており、障害者を特別意識しません。日本にもそんな日が早く来てほしいと思います。そのためには、まず、障害者を知ること。知ろうとすること。東京パラリンピックが、多くの日本人の障害者に対する意識が変わるきっかけになることを、僕は強く望んでいます。